

望岳山荘
にて

一九八九年から九〇年にかけての世界の変化は、言うなれば脱二十世紀的なものであった。脱社会主義と脱冷戦という二つの大きな基軸で歴史は動いているけれど、新しい一九九一年は、二十一世紀への本格的な過渡期として、右のような動きをいよいよアジア太平洋地域においても刻みはじめるとはなからうか。

このような国際環境の変化は、国際社会の流動性をさらに強め、様々なレベルの国際交流を活発化させるであろうから、やがては各地方都市の国際化の真面目な問うにちがいない。なぜなら、昨今一種の国際化はやはり、上すべりの国際化

もあちこちに散見されるからである。各都市が国際化時代に本格的に取り組むためには、もつと主体的に、それぞれの都市の自然環境や伝統的な風土に根ざすべきであろうし、同時に狭い郷土意識ではなく、開かれたローカリズムにこそ立脚すべきであろう。

この点で注目される試みに、現在、福岡市が着々と進めている「アジア太平洋センター」構想がある。この構想は、同市が市制百周年記念として開催したアジア太平洋博覧会(通称よかトピア)の成果に基づいて、アジア太平洋地域の活力ある発展にリンクした国際交流を、福岡という「地方」に基盤を置きながら、アジア太平洋地域のそれぞれの「地

方」の発展にも寄与するかたちで練られている。具体的には地域研究(Area Study)を中心にした学術文化交流や人材養成、資料・情報ネットワーク、語学研修センターや市民サロンそれに国際会議場や宿泊施設なども含めた壮大な計画であり、このほどようやく基本的なコン

セプトが出来上ったばかりである。しかし、それまでには、福岡ユネスコ協会や国連大学との連携による数次の国際会議や公開シンポジウムを重ねるなど、桑原・福岡市長以下の市当局の努力も並々ならぬものであった。もとより、福岡市役所には総務局企画調整部を中心に同構想推進のた

「田園都市圏」への飛躍

めのスタッフがすでに育成されている。想えば、二十一世紀がアジア太平洋の時代であろうというアイデアは、はやくも一九七〇年末に大平政権時代の政府政策構想として提起された「環太平洋連帯構想」に基礎を置くとも言えなくはない。それがいよいよ福岡市を受け皿として九〇年代に具

体化されようとしているのだ。一方、同じ政府政策構想としては、「田園都市構想」もあつたけれど、こちらの方は、また具体化せずに、アイデア倒れに終わっている。

的に発展させるべきではなからうか。その場合には、たとえばフランス国境に近いドイツのザールブリュッケン地域が一つのモデルになるかもしれない。ちょうど東京と松本間ぐらの距離をフランクフルトから隔っているザールブリュッケンは、工業地帯、大学都市、商業地、住宅地帯が区分されて調和を保つ一種の広域的な「田園都市圏」である。松本・安曇野・東西筑摩

を一つの「田園都市圏」と位置づけて、福岡市に負けないほどの国際化をはかることができたなら、この自然と歴史に恵まれた松本平「田園都市圏」は、二十一世紀の世界に向けて、大きく遅しく開かれてゆくであろう。(中嶋 嶺雄・東京外国語大学教授)